

地域団体商標の取得で
知名度を高め、観光客を
誘致し地域活性化へ

兵庫県 南あわじ市

淡路島 3年とらふぐ

瀬戸内海東部に位置し、同海で最大の面積を持ち、人口も日本の離島でもっとも多い淡路島。古事記・日本書紀における「国生み神話」では日本列島の中で最初に誕生した島とも言われ、古くから「食の宝庫」として知られています。そんな中、近年特に注目されているのが「淡路島3年とらふぐ」。数年前までは島内の人ですら知らない人が多かったこの養殖のとらふぐですが、商標取得を機に、今では島に活気をもたらす大きな存在となっています。

地域団体商標
地域活性化事例

09

とらふぐ養殖事業の 持続をかけた、 商標登録によるブランド化

淡路島の食の名産として注目されている「淡路島3年とらふぐ」。通常、養殖のとらふぐは2年で出荷されますが、淡路島ではさらに1年多く育て、サイズが大きく身の締まった、天然ものに近い味わいのとらふぐを養殖しています。福良漁業協同組合でも以前は2年で出荷していました。しかし25年ほど前、その年はとらふぐの成長が悪く、このまま出荷しても採算が合わないためもう1年養殖することに。すると翌年ものすごく大きく育ち、出荷先から「今年のは段違いに良い。来年からもこんなとらふぐを作って欲しい」という声がたくさん聞かれたと言います。その後、徐々に3年ものの養殖へシフト。当時、中国産の安いとらふぐや、魚介類消費の減少などの影響があり、90年代後半には1kgあたり5,000円だった卸値は、1,500円~2,000円、一番安い時で1,200円にまで落ち込んでいました。売れば売ると赤字となる状況が2~3年続き、「いよいよ養殖を諦めるか」といった瀬戸際での最後の希望が、安定して高値で取引できる3年もののとらふぐだったのです。当初、関係者からは高い評価を得ていた3年ものですが、一般にはその存在が浸透しておらず、島内でも知らない人がいるほど。また、ブランド名を付ける前は単なる「養殖ふぐ」と見られてしまい、旅館や料理屋でお客様が積極的に注文することも



【権利者】福良漁業協同組合
【住所】兵庫県南あわじ市福良丙28番地
【地域団体商標】淡路島3年とらふぐ
【商標登録】第5416105号

福良漁業協同組合
ホームページへ



なかったと言います。こうした問題を解決し、3年ものおいしさを広めるため、福良漁業協同組合は2011年6月「淡路島3年とらふぐ」の地域団体商標を取得しました。



「淡路島3年とらふぐ」の養殖風景

組合だけではなく、 観光協会や行政との 連携で「三方よし」を実現

「淡路島3年とらふぐ」の商標を取得したことで、マスコミからの取材が増えました。すると取材に対応した淡路島観光協会から「もっと積極的にPRしたい」との要望があり、マスコミ関係者を集めた試食会を大阪で実施。地域団体商標の取得という実績から、品質に確かな自信を持って臨んだ試食会は好評のうちに終了。その後、メディア

への露出がさらに増加しました。これまで閑散期だった冬の淡路島に、「淡路島3年とらふぐ」をターゲットにした観光客が殺到するようになり、今では冬場が夏場と並ぶほどの繁忙期に一変しています。生産者の組合である福良漁業協同組合だけでは、ここまで大きなPR効果は生み出せなかったと言います。PR活動は生産者よりも、旅館や料理屋などからなる観光協会や行政の方が得意な分野。生産者が良いものを作り、観光協会が上手に情報を発信していく。こうした連携と、それぞれの取り組みの相乗効果によって「淡路島3年とらふぐ」は注目を集め、島全体の活性化へとつながっているのです。まさに、「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」が実現できています。現在、福良漁業協同組合では新たな挑戦として、サクラマスサクラマスの養殖に取り組んでいます。すでに「淡路島サクラマス」として地域団体商標にも出願しており、「淡路島3年とらふ

ぐ」とあわせて、食によるさらなる地域活性化を図っていきます。



この方にお話を聞きました!
福良漁業協同組合



組合長
前田 若男 氏

商標取得を機にマスコミで紹介してもらえるようになり、「淡路島3年とらふぐ」の知名度が高まりました。地域活性化にも貢献できたと思っています

この方にお話を聞きました!
やぶ満旅館



若女将
榎本 靖子 氏

商標取得前、冬は宿の修繕を行うような時期でした。それが今ではとらふぐを食べに来られるお客様で予約が埋まり、今でもこの状況を夢のように感じています。

